

向井潤吉

民家 その造形の美

7月30日^土 – 11月27日^日

消え行く日本の風景を惜しみ

それを描き残そうとする

画家の深い感概と真摯な眼差し



〈田麦俣にて〉(山形県東田川郡朝日村田麦俣) 1963年



〈白川郷〉(岐阜県大野郡白川村萩町) 1963年



〈六月の田園〉(岩手県岩手郡滝沢村) 1971年

全国的に都市化が進む今日、各地で高層建築が建ち並び、道が街を貫き、それはごくあたりまえの風景になってきています。画一化された風景に、その土地ごとの味わいや特徴を見出す事は、容易なことではなくなってきました。

しかし、日本は変化に富んだ四季によって、各地域の風土は実に多様な表情を示してきました。そのため、人々はその地方ごとに、個性的な生活様式をつくりだしてきたのです。

草屋根の民家も、それぞれの地方独特の気候や産業、そしてそこに根付く生活のありさまによって、工夫の行き届いた特有な構造やかたちを成してきました。そうした民家のかたちは、土地と共生するために遠い祖先から受け継がれてきた暮らしの知恵と、それぞれの風土が織りなしてきた造形だといえましょう。

たとえば、岩手県の南部曲屋^{なんぶまがりや}は、家族同様に大切にされていた馬が、人と一つ屋根の下に暮らすための家屋として変遷してきたものです。山形県朝日村などの養蚕を営む農家では、庭先には桑が育てられ、養蚕に適した環境をつくるために、屋根裏を幾度にも亘って改造してきました。また、豪雪地帯である岐阜県の白川郷では、屋根を急勾配にすることで、雪の重みから家を守ろうとする工夫が生まれています。

このように、生活に寄り添う住まいには、自然と対峙した先人たちの知恵が幾層にも重なり合っています。それは、自然と人が共生していくために築きあげた相互関係だといえましょう。向井潤吉の画心を刺激し、民家のある風景への共感を呼び起こしたのも、そうした歴史が民家に宿っているためなのでしょう。

向井潤吉は、眼前の風景を単に画面に描きとめるのではなく、その地に生きてきた人々の自然との関わり、そしてその背景までも捉えようと、それぞれの土地をつぶさに見つめながら、絵筆を走らせたのではないのでしょうか。そうした作品一つひとつには、消え行く日本の風景を惜しみ、それを描き残そうとする画家の深い感概と、真摯な眼差しを感じることができます。

人々が生活を通じて生み出した創意工夫は、民家に用の美をもたらし、それは実直な生命感を漂わせています。民家は、人智が自然と調和し、生み出した美しい造形だといえるのではないのでしょうか。